



筑摩世界文學大系

19

デカルト
パスカル

野田又夫 梶田啓三郎
伊吹武彦 松浪信三郎
中村雄二郎 訳



方法序説 省察 情念論
パンセ プロヴァンシアル

筑摩書房

筑摩世界文學大系 19

昭和四十六年九月六日

初版第一刷発行

デカルト・パスカル

訳者代表

野田 又 夫

発行者

竹之内 静雄

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一―二三三

印刷

三晃印刷

製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0310 (製品) 20619 (出版社) 4604

目次

デカルト

方法序説

野田又夫訳 5

省察

榊田啓三郎訳 39

情念論

伊吹武彦訳 89

パスカル

パンセ

松浪信三郎訳 141

プロヴァンシアル

中村雄二郎訳 373

第一の手紙 第五の手紙 第六の手紙 第七の手紙 第十
一の手紙 第十二の手紙 第十八の手紙 第十九の手紙

年	解	人間デカルトの一面
譜	説	パスカルの『パンセ』

野	青	T. S. 野	ウ
田	木	エ	ア
又	雄	リ	レ
夫	造	オ	リ
	訳	ット	夫
		ト	訳
457	446	437	433

デ
カ
ル
ト

方法序説

理性をよく導き、もろもろの学問において真理を求めるための方法についての序説

この序説が長すぎて一気に読みとおせぬようなら、六部に分けてもよい。第一部では、もろもろの学問についてのさまざまな考察が示されるであろう。第二部では、著者が求めた方法のふくむおもな規則が示されるであろう。第三部では、著者がこの方法からとりだした道徳の規則のいくつかが示されるであろう。第四部では、著者が神と人間精神との存在を証明するに用いた諸理由、すなわち著者の形而上学の基礎、が示されるであろう。第五部では、著者が探求した自然学の諸問題の順序および特に心臓の運動と医学に属する他のいくつかの問題との説明、さらにまた、われわれの精神と、動物の精神との間に存する相違が示されるであろう。最後の第六部では、著者が自然の探求においてさらに前進するため必要だと考えるものは何であるか、かれに著述をさせた理由は何か、が示されるであろう。

第一部

良識はこの世で最も公平に配分されているものである。というのは、だれもかれもそれを充分に与えられていると思っていて、他のすべてのことでは満足させることにはなだむずかしい人々でさえも、良識については、自分がもっている以上を望まぬのが常だからである。そしてこの点において、まさかすべての人が誤っているとは思われない。むしろそれは次のことを証拠だてているのである、すなわち、よく判断し、真なるものを偽なるものから分つところの能力、これが本来良識または理性と名付けられるものだが、これはすべての人において生れつき相等しいこと。したがってわれわれの意見がまちまちであるのは、われわれのうちの或る者が他の者よりもより多く理性をもつから起るのではなく、ただわれわれが自分の考えをいろいろちがった途によって導き、また考えていることが同一のことでない、ということから起るのであること。というのは、よい精神をもつというだけでは充分ではないのであって、たいせつなことは精神をよく用いることだからである。最も大きな心は、最も大きな徳行をなしうるのと同時に、最も大きな悪行をもしうるのであり、ゆつくりとしか歩かない人でも、もしいつもま

つすぐな途をとるならば、走る人がまっすぐな途をそれの場合よりも、はるかに先へ進みうるのである。

私はどうかといえば、自分の精神が、いかなる点でも、普通の人より完全であるなどと思つたことはない。それどころか、私はたびたび、ほかの人々のもっているような、すばやい考えを、はつきりしてまぎれない想像を、内容ゆたかな、またすぐに答えられる、記憶を、もちたいと望んだものである。そして精神の完全性をつくる性質としては、上の諸性質以外のものを私は知らない。というのは、「上に挙げなかった」理性すなわち判断力のほうは、そののみがわれわれを人間たらしめわれわれを動物から分つところのものであるゆえに、めいめいに完全な形でそなわっていると、私は考えたいのであり、この点では哲学者たち(スコラ哲)の普通の意見に従いたいのだからである。かれらの考へでは、同じ種(espee)に属する個体(individus)において、それらのものもつもろもの偶有性(accidents)の間のみ、より多いとかより少ないとかいうことが存するのであって、それら個体の形相(formes)すなわち本性の間には、多少ということも存しないのである。

しかしながら私にもはばかりなくいえることがある。それは、自分はいへん運がよかつたと思つている、ということだ。すなわち年少のところにはや、或る途を見つけ出し、それによっていくつかの見解と格率とに導かれ、これらか

私は一つの方法をつくりあげたのである。その方法というのは、それによって私の認識をだんだんに増し、少しずつ高めて、ついには、私の凡庸な精神と私の短い生涯とをもつて私の認識が達しうる最高点にまでいたろう、と思われような、方法である。というのは、私はすでにその方法をもって幾多の成果を得ているのであって、たとえ私が自分について下す判断ではいつも自負よりはむしろ不信のほうへ傾こうとつとめているにせよ、また哲学者の眼をもって人みななささまざまな行動や事業をながめるときはほとんどすべてが空しく無益なもののように私には見えるにせよ、真理の探求において私がすでに果したと考える進歩には、私はやはりこの上ない満足を感じざるをえず、未来に対して、大きな希望をいだかざるをえないのであって、単なる人間としての人間の仕事(宗教以外のすべて)の中で、まちがいなく善で有益なものが何かあるならば、それこそ私の選んだ仕事だ、とあえて考えるほどのだからである。

しかしながら、もしかすると、私はまちがっているのかも知れない。私が金やダイヤモンドだと思っているものが、ひょっとすると銅やガラスのかけらにすぎぬのかもしれない。自分自身に關することがらについてはわれわれはまことに誤りやすいこと、また友だちの判断がわれわれにつごうのよいものである場合それはまことに疑うべきであることを、私は知っている。しかし私はこの序説において、私のとつてきた途がいかなるものであるかを示し、私のいままでの生活を、いわば一枚の画としてえがいて、めいめいそれについて判断してもらい、世間のうわさからそれについての人々の意見を知り、これを、自分を教育するための一つの新たな手段として、いままですつねに用いてきたものにつけ加えたいのである。

それゆえ私の企ては、各人がその理性をよく導くためにとるべき方法をここで教えようとするのではなく、ただいかなる仕方でも私が自分の理性を導こうとつとめてきたかを示すだけのことなのである。他人に教訓を与える役を買って出る者は、教訓を与える相手よりも有能だと自任しているはずであり、もしかれ自身ほんの少しでも落度があれば、そのため当然非難を受けねばならない。しかし私は、この書物一つの歴史として、またはお望みならば一つの寓話(ちやうど)として、示すだけであり、その中には模範として倣ってよいいくらかのことともに、従わぬほうがよいと思われる多くの他のこともたぶん見いだされるであろうことはもちろん承知なのであるから、私はこれが、或る人々にとっては有益であつてしかもだれにも有害ではないであろうということを、かつ、すべての人が私の率直さを満足に思つてくれるであろうということを、期待するのである。

私は幼少のころから文字の学問で育てられ、それによって、人生に有用ならゆること、明らかな確実な認識を得ることができると言

きかされていたので、それを学ぼうという非常な熱意をいだいていた。しかしながら、学業の課程を全部終えて、人なみに学者の仲間に入られるやいなや、私の考えは全く変つた。なぜなら私は多くの疑いと誤りとなやまされ、知識を得ようとするものがらかつていよいよ自分の無知をあらわにしたというほかには、なんの益も得られなかつたように思われたからである。しかしそうはいふものの、私がいたのはヨーロッパの最も有名な学校の一つ(シエズヴィツのシエズヴィツ)であり、この地上のどこかに学識ある人がいるのならば、ここにこそいるはずだ、と私は思っていた。ここで他の人々の学ぶことはすべて私も学んだ。のみならず、教えられる学問だけでは満足せず、きわめて秘術的な、世の常ならぬものと考えられている学問(占星術、手相術)を説いた書物でさえ、私の手に入れたかぎりのものにはすべて目を通した。なおまた私には、他人が私をどう評価しているかもわかつていたのであり、私の仲間の学生たちのうちには、私たちの先生のとつぎに定められていた者もすでにいたのだけれども、そうかといつて私が仲間より劣ると見られているとは思わなかつたのである。そしてさらにつけ加えれば、われわれの時代は前のいかなる時代にも劣らずはなばなししい時代であつて、多くのすぐれた人々を生み出しているのである。そこでこれら数々の理由から私は、自分自身をもとにして他のすべての人のことを判断してもかまわぬ、また以前に人

から聞いて得たいと思つたような学問は、まだこの世の中に存在していなかったのだと考へてもかまわぬ、という氣になつたのである。

しかしながら、それでも私は、学校でする勉強をやはりたいせつだとは思つていた。私はよく心得ていた——学校で学ばれる諸国語(ギリシヤ語、ラテン語)が古代の書物を理解するために必要であること。寓話のおもしろさは精神をよびさますということ。歴史の物語る目ざましい出来事は精神を高めるものであり、慎重に読むなら歴史は判断力を養う助けとなること。すべての良書を読むことは、それらの著者であるところの、過去の時代の最もすぐれた人々との、いわば談話であり、しかもかれらがその思想の最上のものをわれわれに示してくれる、よく準備された談話なのであること。雄弁は比類ない力強さと美しさをもつこと。詩はまことに心を奪うような、うまい着想とところよい文句をもつこと。数学はきわめて巧みな工夫の数々を示し、これらの工夫は、学問好きな人をよろこばすためにも、またあらゆる技術を容易にして人間の労苦を減らすためにも、大いに役に立つこと。道徳を論じた書物は、教訓と徳のすすめとの多くをふくみ、これははなはだためになるものであること。神学は天国に至る道を教えること。哲学はあらゆることについてまことしやかな話をし、学浅い人々の賞賛を博する手段を与えること。法学や医学その他の学問は、それを学ぶ人々に名譽と富をもたらしということ。そし

て最後に、これらの学問について、その最も迷信的で偽り多きものについてさえ、それらの正しい価値を知りそれらに欺かれぬようにするために、このようにすべてを吟味し終へたことは、無益ではなかつたということ。

しかしながら私は、諸国語を学ぶことに、また古い書物を読むことに、その語る歴史や寓話に、もはや充分な時を費した、と考へていた。というのは、前の時代の人々と語るとは、旅をするということ、いわば同じことだからである。「旅に出て」種々ちがつた国民の習俗のいくらかを知ることは、われわれ自身の習俗についていっそう健全な判断を下すためにも、また物を見たことのない人がよく考えるように、われわれのやり方に反することはすべて滑稽であり理性に反しているなどと、思わぬようになるためにも、有益ではある。けれども旅行に時を費しすぎると、けつきよく自分の国では他国者のようになつてしまふ。同様に過去の時代に行われたことがらにあまり興味をもちすぎると、いまの時代に行われていることがらに対しては、たいていきわめて無知な状態にとどまつてしまふものである。そのうえまた、寓話は、実際ありえぬ多くのことを、ありうるかのように想像させるし、また歴史はその最も忠実なものでさえ、たとえそれらが読みがいを増すために事物の価値を変えたり増したりはせぬとしても、少なくとも、比較的つまらぬ、あまりはえない事情は省略するのが、ほとんど常のことである。そこ

で、残りの部分は、そのあるがままの形では示されていないことになり、歴史から得た模範によつて自分の行動を律する人々は、われわれの物語に出てくる騎士のような突飛なふるまいにおちいつたり、自分の力をこえたたくろみを中心にだくようになつたりしがちなのである。

私は雄弁をたいへん尊重し、詩には夢中になつていた。しかし私は両者がいづれも、学んで得られるものであるよりは、むしろ生れつきの才能である、と思つた。きわめて強い推理力をもち自分の思想を最もよく秩序づけて、それを明晰にかつ理解しやすくしうる人々は、たとえかれらがブルターニュ海岸の方言しか語らず、修辭学を一度も習つたことがなくとも、自分のべるところをいつも最もよく人々に納得させるのである。そして最も人の氣に入る着想をもち、多くの美しい文句やうまい文句でそれを表現しうる人々は、たとえ詩学を知らなくとも、やはり最上の詩人であることに変わりはないのである。

私はとりわけ数学が氣に入つていた。その推理の確實性と明証性とゆゑに。しかし當時はまだそのほんとうの用途をさとしてはいなかつた。そしてそれが機械的技術にのみ役立てられていたことを思つては、その基礎がこのようになりつかりして動かぬものであるにもかかわらず、いままですの上にもっと高い建物をだれも建てなかつたことをあしぎに思つていた。数学とは反対に、私は道徳を扱つた古代異教徒た

ち(ストアの哲学者たち)の著書をば、砂と泥の上に建てられたにすぎぬ、きわめて豪華な壮麗な宮殿にたとえていた。かれらは徳を大いに賛美し、世のすべてのものより尊いものだと思わせる。しかしかれらは、いかにして徳を認識すべきかを、充分には教えてくれない。そして多くの場合、かれらが徳という立派な名で呼んでいるものは、冷酷あるいは傲慢あるいは絶望あるいは親族殺し(ブルトウッスがわが子)にすぎないのである。

私はわれわれの神学を尊敬していた。そして他のだれにも劣らず天国に至りたいと望んでいた。しかしながら、天国への道が、最も無知な人々にも、最も学識ある人々にと同様に、開かれているといふことを学び、かつわれわれを天国に導くところの、啓示された真理というものが、われわれの理解をこえたものであることを学んだ後は、それらの真理を私の弱い推理力によって支配しようとは考えなくなった。それらの真理の吟味を企てて功を収めるには、神から与えられる異常な助力を必要とし、人間以上のものにならねばならないのだ、と考えた。

哲学については次のことだけ言っておこう。それが、幾代もの間に現われた、最もすぐれた精神をもつ人々によって研究されてきたにもかかわらず、いまだに、論争の余地のない、したがって疑いを容れる余地のないようなことがら、何ひとつ哲学には存しないのを見て、私は自分がほかの人々よりもうまくやれるなどという自負心をもちえなかつたということ。そして同

一の問題については、真実な意見は一つしかありえないはずであるのに、事実はまだことに多くのちがった意見が行われ、それがそれぞれ学識ある人々によって主張されているのを見て、私は、真実らしくあるにすぎぬことがらのすべてを、ほとんど偽なるものと見なしたということ。次に、その他の学問についていえば、それらは原理を哲学から借りているのであるから、あのようにあやふやな基礎の上には堅固な建物がたてられうるはずはない、と判断した。そしてそれらの学問が約束する、名譽も利得も、私をさそつてそれらを学ばせるには足りなかつた。

というのは、私は、ありがたいことに、自分の財産のついでを滅らすために学問を職業としなければならぬような、境遇にあるとは感じなかつたからである。そして私はキュニコス派の哲学者にならつて名譽を軽んじて得々とすることはなかつたけれども、しかしにせものを本物と見せかけることによつてしか得られれないと思われような名譽を、重んずるなどということは決してなかつたのである。そして最後に、かのあやしげな学説とはいへば、私はすでにその正体を知つていて、もはや錬金術士の約束によつても、占星術士の予言によつても、魔術師の幻術によつても、また自分の知らぬことまで知つていると言いたてる者どもの手管(てくだ)をほら話によつても、欺かれる心配はないと思つてた。

こういふわけで私は、成年に達して自分の生れた手から解放されるやいなや、書物の学問をまったく捨てたのである。そして、私自身のうちに見いだされうる学問、あるいはまた世間という大きな書物のうちに見いだされうる学問のほかは、もはやいかなる学問も求めまいと決心して、私は私の青年時代の残りも旅行に用い、あちらこちらの宮廷や軍隊を見、さまざま

な氣質や身分の人々を訪れ、さまざまな経験を重ね、運命が私にさしだすいろいろな事件の中で私自身を試そうとし、いたるところで、自分の前に現われる事物について反省してはそれから何か利益を得ようとなつてたのであつた。というのは、めいめいが、自分にとつてはたいせつで、判断を誤ればすぐにその結果によつて罰せられるほかにようなことがらについて、なすところの推理の中には、学者が書齋で単なる理論についてなす推理の中にも、はるかに多くの真理を見つけ出せると私には思われたからである(学者のもとめる単なる理論は、なんの結果をも生まないものであつて、それが常識からかけ離れていれはいるほど、それをまことらしく見せかけようとして、それだけ多くの機知と技巧を用いねばならなかつたわけだから、そこから学者がとりだす虚栄心の満足もまたそれだけ大きい、というほかには、なんの益もかれにもたらさないものなのである)。かくて私は、私の行動において明らかに、確信をもつてこの世の生を歩むために、真なるものを偽なるものから分つすべを学びたいという、極度の熱意をつねにもちつづけた。

問をまったく捨てたのである。そして、私自身のうちに見いだされうる学問、あるいはまた世間という大きな書物のうちに見いだされうる学問のほかは、もはやいかなる学問も求めまいと決心して、私は私の青年時代の残りも旅行に用い、あちらこちらの宮廷や軍隊を見、さまざま

さて私が他の人々の行動を観察するのみであった間は、私に確信を与えてくれるものをほとんど見いださず、かつて哲学者たちの意見の間に認めたのとほとんど同じ程度の多様性をそこに認めたことは事実である。したがって、私が入りの行動の観察から得た最大の利益はといえど、多くのことがわれわれにとつてはきわめて奇矯で滑稽に思われるにもかかわらず、やはりほかの国々の人によつて一般に受け入れられ是認されているのを見て、私が先例と習慣によつてそうと思ひこんだにすぎぬことがらを余りに固く信ずべきではない、と知ったことであつた。かくて私は、われわれの自然の光(性理)を曇らせ、理性に耳を傾ける能力を減ずるおそれのある、多くの誤りから、少しづつ解放されていったのである。しかしながら、このように世間という書物を研究し、いくらかの経験を獲得しようとして数年を費した後、ある日私は、自分自身をも研究しよう、そして私のとるべき途を選ぶために私の精神の全力を用いよう、と決心した。そしてこのことを、私は、私の祖国を離れ私の書物を離れたおかげで、それらから離れずいたとした場合よりも、はるかによく果しえた、と思われ。

第二部

当時私はドイツにいた。そこでいまなお(一七六一年)終つていないあの戦争(三千年戦争。一六一)に心ひかれて私はそこへ行つていたのである。そして皇帝の戴冠式(一六九九年フランクフルト・アム・マインの戴冠式)でドイツ皇帝フェルディナント二世(冠式)を見た後、軍隊に帰る途中、冬がはじまつて或る村にとどまることになつたが、そこには私の気を散らすような話の相手もおらず、また幸いなことになんの心配も情念も私の心をなやますことがなかつたので、私は終日部屋にただひとりと同じこもり、この上なくつろいで考えた最初のこともどもの一つは、多くの部分から組み立てられ多くの親方の手でできた作品には、多くの場合、ただ一人が仕上げた作品におけるほどの完全性は見られない、ということである。いろいろな方面からよく考えてみようと思ひついたことであつた。たとえば、ただひとりの建築家が設計し完成した建物は、ほかの目的のために作られた古い城壁などを利用することによつて、多くの人の手できつくりわれて出来あがった建物よりも、美しくまた秩序だつてゐるのが常である。同様にまた、はじめ城下町にすぎなかつたのが、時がたつにつれて大きな町となつたところの、あの古い都市は、ひとりの技師が平

野の中で思ひのままに設計してつくつた規則正しい町にくらべると、たいていは全体のつりあいがとれておらず、なるほどその中の建物を一つ一つ別々に見れば、新しい町の建物に見られると同じくらい、あるいはそれ以上の巧みが見いだされるけれども、しかしそれらの建物が、ここには大きいのが、あちらには小さいのが、というふうにならんでゐるのを見、またそのために街路が曲りくねり高低になつてゐるのを見ると、それらをそのように並べたものは、理性を用いる人間の意志であるよりはむしろ偶然である、と言ひたくなる。しかしそれでも、私人の建物を町全体の美観に役だてるために監視する任務をもつた役人が、どの時代にもいたということを考えると、他人の作品に手を加へるだけでは、出来のよいものを作りだすことがむずかしい、ということとはよくわかるであらう。同様にまた私はこうも考えた、昔はなつかげ野蠻の状態にありそののち徐々にしか開化せず、その法律をば、犯罪や争いのわずらひに強いられてのみ作つてきた国民は、寄り合つた最初から、或る賢明な立法者の作つた憲法を守つてきた国民ほどには、よく治められてはありえないであらう、と。それは、神のみがもろもろの掟を命じたところの、真の宗教のもつ体制が、あらゆる他の体制よりも、比較にならぬほどよく秩序づけられてゐるにちがいない、のと同様である。そして人間世界のことをいへば、スパルタがその昔大いに栄えたのは、その法律の一つ一つが

すぐれていたゆえではなく（それらの多くはきわめて奇妙なものであって、良俗に反してさへもいたから）、それらの法律がただひとりの手で作られたもの（*スカルゴ*）であるために、すべて同一の目的に向っていたからである。同様にしてもまた私はいくつも考えた、書物による学問、少なくともその推理が蓋然的であるにすぎず、なんらの論証をもたないところの学問は、多くのちがった人々の意見から少しづつ組み立てられ広げられてきたものであるから、良識あるひとりの人が、眼の前に現われることさらに関して、生れつぎのもちまえてなしうる単純な推理ほどには、真理に近くありえない、と。同様にまた私はいくつも考えた、われわれはすべて一人前の人間であるまに子供であったのであり、長い間われわれの自然的欲望と教師とに支配されねばならなかったが、これら二つのものはしばしば互に反対し合い、それらのいづれも、いつでも最善のものをわれらに選ばせたとはいえないのであるから、われわれの判断は、われわれが生れた初めからわれわれの理性の完全な使用ができてきた理性によってのみ導かれてきたとかりに考えてみた場合ほどには、純粹であり確實であることは、ほとんど不可能なのである。

町の建物を作りかえ街路をいっそうりっぱにしようという計画だけのために、あらゆる建物をとりこぼすなどということが見うけられないのは事実である。しかしながら、多くの人が自分の家を建てかえるためにこぼさせることはよくあるし、家がひとりで倒れそうになったり土台が充分しつかりしていない場合には、とりこぼしたざるをえぬことさえ時にはあるものだ。こういう例を考えて私は、次のような信念をもつようになったのである。一私人が、一國のすべてを土台から作りかえそれをいったんくつがえして建て直すというやうなやり方で、國を改革しようとする計画することは、まことに不当なことであり、またそれほどのことでなくとも、もろもろの学問の組織を、あるいは学校でもろもろの学問を教えるために定められている秩序を、改革しようとするにすらも、一私人の計画すべきことではないであらう。しかしながら私がいままで自分の信念のうちに受けいれたすべての意見に関しては話は別であって、一度きつぱりと、それらをとり除いてしまおうと企てること、そしてそうしたうで再び、ほかのいっそうよい意見を取り入れるなり或いは前と同じ意見でも一度理性の規準によって正しくととのえたりうでとり入れるなりするのが、最上の方法なのである。そしてこの方法をとることによって私は、自分がただ古い土台の上に建てたにすぎなかった場合よりも、また幼い時に教えこまれた諸原理のみを、それが真理であるかどうかいちども吟味せず、自分のよりどころとした場合よりも、はるかによく私の生活を導くことに成功するであらう、とかたく信じたのである。なぜなら、この仕事においてさまざま

それらには対策がないわけではなかったし、またその困難は、おおよけのことがらに関する、ほんのわずかな改革のうちにも見いだされる困難とは、比較にならず小さなものであるから。おおよけの組織という、これら大規模な建物のほうは、いったん倒されると、また建て直すことがあまりにもむずかしく、それどころかゆりうごかされてもちこたえるということさえむずかしく、その倒壊はまことにひどい結果を生まざるをえない。そしてまたこれら組織のもつ不完全性について考えてみると、いったいそれらが種々異なった形をもつという事実がすでに、それらの多くが不完全性をもつことを思わせるに充分なのであるけれども、しかしいろいろ不完全なところはあってもそれらは、明らかに慣習というものによって、大いに和らげられているのである。のみならず慣習は不完全性の数々を知らずしらすの間にとり除いたり改めたりさえもしているものであって、われわれが知恵をしぼってもこううまくはゆかぬと思われるほどである。また最後に、そういう不完全性はいわゆる建物の変革よりも辛抱しやういものである。あたかも山々の間をうねりくねって行く本道が、人の通るにつれて少しずつ平らに歩きやすくなり、近道をして岩をよじ上ったり崖の下まで降りたりするよりは、その本道を行くほうがはるかによい、のと同様である。

このゆえに私は、生れついた身分からいって最後に得た地位からいって公事をつかさどる

ことを求められてはいないのに、いつも頭の中
で何か新たな改革を考へることをやめない、出
すぎたおちつかぬ気質の人々を、どうしても是
認しえないのである。そしてこの書物の中に、
そういう愚かな考えを私がつもっているかと人に
思わせるような点が少しもあると思つたのなら、
私はこの書物の公刊をゆるすなどという気に
決してならなかつたであらう。私の計画は、私
自身の考えを改革しようとして、全く私だけ
のものである土地の上に家を建てようとするこ
と以上に及んだことは決してない。私のやつた
ことが私には充分満足すべきものであつて、こ
こにその模型を讀者に示すとしても、だからと
いつてそれに倣うことを人にすすめようとする
つもりなのではない。神の恩寵をさらにゆたか
にめぐまれた人ならば、たぶんもっと高い計画
をいだくことであらう。しかし私は、私のこの
計画でさえもすでに、多くの人にとっては大胆
すぎるのではないかと危ぶむのである。以前に
自分の信念のうちに受け入れたあらゆる意見を
捨てようという決心だけでも、だれでもが倣つ
てよい例ではない。世間は、そういうことに全
く適しない二種類の人々からのみ成つていて
いつてもよいほどなのである。すなわちその一
つは、自分を実際よりもずっと有能であると思
いこんでいて、何ごとについても早まつた判断
を下すのを控へえず、自分のすべての思想を順
序正しく導くに足るだけの忍耐をもたぬ人々で
ある。そういう人々は、いままで受け入れた原

理について疑い、普通の道から離れる、という
自由をひとたび手に入れると、いつそやまつす
ぐに行くために取らねばならぬ小径をも決して
たどることができず、一生涯あちらこちらをさ
まよいつづけるであらう。第二は、自分たちが
真を偽から分つる能力において、自分たちを教え
うる或る他の人々よりも劣つて、自分たちを教え
るだけの理性あるいは謙遜けんそんをもつていない人々
であつて、こういう人々は自分自身でいつそ
よい意見を求めるよりは、他の人の意見に従う
ことに、むしろ満足すべきなのである。

ところで私のことをいへば、もし私がただ一
人の先生しかもたなかつたならば、あるいはま
たえらい學者たちの意見がいつの時代でも種々
異なつていたのを知るに至らなかつたならば、
私は疑いもなく第二の種類の人間に数えられた
であらう。しかし私は、すでに学校時代に、ど
んな奇妙な信じがたいことでも哲學者のだから
がすでに言つていたものだ、ということを知つ
た。またその後旅に出て、われわれの考えとは
全く反対な考えをもつ人々も、だからといつて、
みな野蛮で粗野なものではなく、それらの人々の
多くは、われわれと同じくらいに或いはわれわ
れ以上に、理性を用いていくのだ、ということ
を認めた。そして同じ精神をもつ同じ人間が、
幼時からフランス人またはドイツ人の間で育て
られるとき、かりにずっとシナ人や人喰い人種
(アマ土人)の間で生活してきたとした場合とは、
いかに異なつた者になるか、を考え、またわれ

われの着物の流行においてさえ、十年前にはわ
れわれの氣に入りまたおそらく十年たたぬうち
にもういちどわれわれの氣に入ると思われる同
じものが、いまは奇妙だ滑稽だと思われること
を考えた。そしてけつきよくのところ、われわ
れに確信を与へているものは、確かな認識であ
るよりもむしろはるかにより多く習慣であり先
例であること、しかもそれにもかからず少し
発見しにくい真理については、それらの発見者
が一国民の全体であるよりもただひとりの人で
あるというこのほうがはるかに真実らしく思
われるのだから、そういう真理にとつては賛成
者の数の多いことはなら有効な証明ではない
のだ、ということを知つた。こういう次第で私
は、他をおいてこの人の意見をこそとるべきだ
と思われような人を選ぶことができず、自分
で自分を導くということをし、いわば、強いられ
たのである。

しかし私は、ただひとり闇くらの中を歩む者のよ
うにゆつくりと行こう、すべてに細心の注意を
はらおう、と決心した。そしてそうすれば、た
とえ少ししか進めなくとも、せめて倒れること
だけはまぬがれるだろう、と考へた。のみなら
ず私は、理性に導かれずに前から私の信念の中
へはいりこんでいた意見のどれをも、はじめか
ら一挙に投げすてようとは思わなかつた。それ
に先立ちまず充分な時間を費して、自分の企て
る仕事の計画を立て、自分の精神が達しうるあ
らゆる事物の認識にいたるための、真の方法を

求めようとしたのである。

私はまだ若いときに、哲学の諸部門のうちでは論理学を、数学のうちでは幾何学者の解析と代数とを、少しばかり学んでいた。そしてこれら三つの技術あるいは学問は、私の計画にいくらか役立つはずだと思つたのである。しかしそれらを吟味してみると、まず論理学については、次のことが気づかれた。すなわちその示す三段論法やその他の教えの大部分は、ものを学ぶためによりはむしろ、すでに自分が学び知つてあることを他人に説明するために、役だつており、あるいはまたかのルルスの術(ライムンドゥック二二六—二二五の說)のように、みずからの知らないことがらについて、なんの判断もせず、ただしゃべるといふために、役立つものである。そして論理学には実際きわめて真できわめて善なる多くの規則がふくまれてはいるが、同時にそれと混ざつて、有害ないしは無用な多くの他の規則がそこにはあり、それらよはうの規則をわるいものから分離することは、まだ荒削りもしない大理石のかたまりからディアアーナの像やミネルヴァの像を刻み出すこととほとんど同じくらいむずかしいのである。次に、古代人の解析(ギリシアの幾何学)で主に作題について、これにさかのぼる方法と近代人の代数(新たにアラビヤ人か方法で、やはり求める量を既知と仮定して、方程式をつつて進む方法)とについていけば、それらはいづれも、きわめて抽象的でないの役にまたたぬと思われる問題にのみ用いられているばかりでなく、前者すなわち古代人の解

析のほうは、つねに図形の考察に縛られていて、想像力を大いに疲労させることなしには悟性をはたらかせないものである。また後者すなわち近代人の代数においては、人々は或る種の規則と或る種の記号とにひどくとらわれていて、それを、精神を育てる学問どころか、むしろ精神をなやますところの、混乱した不明瞭な技術にしてしまつていたのである。こうしたことからは、これら三つの学問の長所を兼ねながら、その欠陥をまぬがれているような、何か他の方法を求めねばならぬと考へた。そしてたとえ法律が多くあることはしばしば悪行に口実を与えるものであり、国家はわずかの法律しかもたずしかもそれがきわめて厳格に守られている場合のほうは、はるかによく治まつているのであるから、私は、論理学を構成するあの多数の規則の代りに、たとえ一度でもそれからはずれまいという固い不動の決心をさへするならば、次のべる四つの規則で充分である、と信じた。

第一は、私が明証的に真であると認めたいものでなくてはいかなるものをも真として受け入れないこと。いかえれば、注意ぶかく速断と偏見とを避けること。そして、私がそれを疑ういかなる理由ももたないほど、明晰にかつ判明に私の精神に現われるもの、以外の何ものをも、私の判断のうちにとりいれないこと。

第二、私が吟味する問題のおののを、できるかぎり多くの、しかもその問題を最もよく解くために必要なだけの数の、小部分に分つこと。

第三、私の思想を順序に従つて導くこと。最も単純で最も認識しやすいものからはじめて、少しずつ、いわば階段を踏んで、最も複雑なものの認識にまでのぼつてゆき、かつ自然のままでは前後の順序をもたぬもの間にさえも順序を想定して進むこと。

最後には、何ものも見おとすことがなかつたと確信しうるほどに、完全な枚挙と、全体にわたる通覧とを、あらゆる場合に行ふこと。

幾何学者たちがかれらの最も困難な証明に到達するために用いるを常とする、全く単純な容易なるもの推理の、あの長い連鎖は、私に次のようなことを考える機縁を与えた。すなわち、人間の認識の範囲に入りうるすべての事物は、同様な仕方方で互につながつているのである、それら事物のうち、真ならぬいかなるものも真として受け入れることなく、かつそれら事物の或るものを他のものから演繹するに必要な順序を常に守りさえするならば、いかに遠くへだたつたものにもつけつきよくは達しうるのであり、いかにかくされたものでもつけつきよくは発見しうるのである、ということ。そしてこのときのようなものからはじめねばならぬかを探ねるのに、私はたいして手間どらなかつた。なぜならば、私はすでに、それが最も単純で最も認識しやすいものからであることを知っていたから。そしてそれまでに学問において真理を探求したすべての人々のうちで、いくつかの論証を、すなわちいくつかの確實で明証的な推理

を、見だした者は、ただ数学者のみであつたことを考へて、私は数学者が吟味したのと同じの問題をもつてはじめるべきだということを疑わなかつた。もつとも、私がそういう数学の問題から得ようとする期待したのは、私の精神がいつも真理を糧とし、偽りの推理には甘んじないという習慣を得る、ということだけであつたがしかしながら、このように数学からはじめねばならぬといつても、私は、数学という共通の名によつて指示される数々の個々の学問のすべてを学ぼうと企てたわけではない。そして、これら学問の対象は種々異なつてはいるものの、それら学問は、対象において見いだされるさまざまな関係すなわち比例(原語は rapports, or proportions, 比は比例といふのでなく、即ち關係と大小相等の量的關係の両方をふくめて、關係とか比例とかいふのである)のみを考察するという点において、すべて一致しているのを認めて、私は次のようにするのがよいと考へた。すなわち、これらの比例のみを一般的に吟味すること、しかもそういう比例の認識を私にとつていつそう容易にするに役立つような対象においてのみ、その比例を想定すること、しかもまたその比例をいつまでもその対象にのみ結びつけておくのではなく、それが適合しうる他のすべての対象にも、後にいつそううまく適用するようにすることである。次に、そのような比例を認識するためには、あるときはそれを一つ一つ別々に考察する必要があり、またあるときはただそれらを心にとめる、いかえればそれらの多くを一度に把握する、必

要があるだろうことに気づいたので、私はこう考へた。まず、それらを個別的に、いつそうよく見るためには、私はそれらを線において想定すべきであること。なぜなら線以上に単純なものには私には見つからなかつたし、また線以上に判明に私の想像と感覚とに示しうるものはなかつたからである。しかし次に、それら比例を心にとめる、いかえればそれらの多くを一度に把握するためには、私はそれらを、できるかぎり短い或る種の記号によつて示さねばならぬこと。そしてこういふふうにするに よつて、幾何学的解析と代数とのあらゆる長所を借り、しかも両者のあらゆる欠点を矯正することになる、と私は考へた。

そして実のところ、遠慮なくいつてしまへば、私が選んだこれらわずかの規則を正確に守ることによつて、私は上の二つの学問の範囲にふくまれるあらゆる問題を容易に解く能力をわがものにしたのである。そしてこれらの学問を吟味するに費した二三月の間に、私は最も単純な最も一般的な問題から手をつけたのだが、私が一つの真理を見いだすと、それが必ずさらに他の数々の真理を見いだすための規則として役だつたから、けつぎよく私は、以前たいへんむずかしいと思つてきた多くの問題(三次四次の方程式など)を解くことができたばかりでなく、最後に、私がまだ知らなかつた問題についてさえも、どういふふうにすれば、どの程度にまで、それらを解くことが可能であるかを、決定しうるよ

うに思われたのである。しかしこのようなことをいふといかにも私が、事実ありえぬことを誇大にいっているかのよう思われるかも知れぬが、それがそうでないことは、次の点を考へて、おそらく認めてもらえるであらう。すなわち、一つのことについてはただ一つの真理しかありえないのであるから、その真理を見つけた人はだれでも、そのことについてはもはや人の知りうるかぎりのことを知つてはいるのであつて、たうらへば子供が算術を心得ていて、その規則に従つて加算を行なつた場合、その子供は、それが問題としてゐる数値については、およそ人間精神の見いだしうるすべてのことを見いだしたのだと確信しうるのである。といふのは、けつぎよくのところ、真実な順序を守り、かつ、求めるものあらゆる条件を正確に枚挙すべしと教えるところの方法こそ、算術の規則に確実性を与えるところのすべてをふくむものなのだからである。

しかしこの方法が私を最も満足させた点は、この方法により、私はすべてにおいて私の理性を、完全にではなくとも、少なくとも私のできるかぎりにおいて最もよく、用いているのだと確信しえたことによつて、さらにまた、この方法をを用いることによつて、私の精神がその対象をいよいよ明晰に判明に考へる習慣を少しずつ獲得してゆくと感じたことであり、また、その方法をなんらかの特殊な問題にかぎつたのではないゆゑに、それを代数の問題に用いた場合と

同様に有効に、他の学問の問題にも用いると期待できたことである。しかしながら、だからといって私は、はじめから、そういう学問の提出する問題のすべてを残りなく吟味しようなどと企てたわけではない。というのは、そのようなことをすればそれこそ方法の命ずるところの順序に違反することになるからである。それら学問の原理はすべて哲学に由来するものであるはずであること、しかも哲学においては私はまだ何も確實なものを見いだしていないこと、に注意して、私は何よりもまず哲学において確實な原理をうちたてることにとむべきだと考えて、しかもそれにおいては速断と偏見とを最ももおそれねばならないのであるから、当時二十三歳であった私は、もっと成熟した年齢に至つたうえでなければ、そういうことの結着をつけようなどと企てるべきではないと考えた。そしてまた、私の精神から、それまでに受け入れていたあらゆる誤った意見を根こそぎとりのぞき、かつ多くの経験を集めて、後に私の推理の材料となるようにし、また私がみずからに課した方法をいよいよしかり身につけるためにそれを絶えず用いしめて、あらかじめ多くの時を準備のために費したうえでなければならぬと考へた。

第三部

さて最後に、自分の住む家の建て直しをはじめるに先立って、それをこぼったり、建築材料や建築家の手配をしたり、自分で建築術を学んだり、そのうえもう注意ぶかく設計図が引いてあったりする、というだけでは充分でなく、建築にかかっている間も不自由なく住めるほかの家を用意しなければならぬのと同時に、理性が私に対して判断においては非決定であれと命ずる間も、私の行動においては非決定の状態にとどまるようなことをなくするため、そしてすでにその時からやほりできるかぎり幸福に生きるために、私は暫定的に或る道德の規則を自分のために定めた。それは三つ四つの格率からなるものにすぎないが、それらを読者にも伝えておきたい。

第一の格率は、私の国の法律と習慣とに服従し、神の恩寵により幼時から教えこまれた宗教をしつかりともちつづけ、ほかのすべてのことでは、私が共に生きてゆかねばならぬ人々のうちの最も分別ある人々が、普通に実生活においてとっているところの、最も穩健な、極端からは遠い意見にしたがつて、自分を導く、ということであった。というのは、いまや私自身の意見をすべて吟味にかけようとして、それらはも

はやなんの価値もないと見はじめているのであるから、最も分別ある人々の意見に従うのが最もよいと信じたのである。そしてペルシア人やシナ人の間にも、われわれの間においてと同じく、分別ある人々がたぶんおるであらうけれども、やはり、私が共に生きねばならぬ人々の考へに従って私を律することが最も有益である、と思われた。そしてまた、それら分別ある人々の意見が、真実にはどういふものであるかを知るためには、かれらが口にするところよりはむしろかれらが実際に行うところに注意すべきであると思われた。これは、われわれの道德が頽廃して、みずから信ずるところをすべて口に出そうとする人はほとんどなくなっている、という理由によるばかりでなくて、いったい多くの人は自分が信ずるところを自分でも知らない、という理由にもよるのである。というのは、人が或ることを信ずるときの思考のはたらきは、自分が或ることを信ずるときの思考のはたらきとは、異なるものであって、前者が後者をとまなわぬことはたびたびあるからである。さらに私は、ひとしく世に受けいれられている多くの意見のうちでは、その最も穩健なもののみを選んだが、これは、一つには、あらゆる極端は悪いものであるのが常であつて、どのような場合にも穩健な意見のほうが実行するにいつそう便利でありおそらくいつそう善いものであるからであり、また一つには、私がまちがう場合にも、穩健な意見をとっているほうが、